

2021年度「卒業生アンケート」の結果について (学生支援の適切性についての定期的な点検・評価)

2022年7月

キャリアセンター
教育開発支援センター

1. 調査方法

2021年12月に、キャリアセンターと連携して卒業生に対するアンケート調査を実施した。前回は2018年度に実施し、今後のアンケート実施の基礎資料とするため、卒業から1～5年経過した卒業生2500名を調査対象とした。卒業経過年数と回収率を見ると、25歳の回収率は19.1%、26歳は15.9%であり、卒業後3年を過ぎると回収率が著しく低下した。また、3年間の離職率を出すためにも、卒業後3年が過ぎた25才を対象に毎年実施することが良いことが分かった。したがって、今回は、2019年3月に卒業した15年度生を対象として946名に依頼した。

質問項目は大学生生活の充実度を問う質問をはじめ、社会に出て感じて抱く、大学在学中にもっと身につければ良かった能力・資質に関するものを中心に本学における質向上に資する設問とした。

2. 調査結果

(1) アンケート回答者の属性

回答依頼数946名に対し、回答者数は96名であった(回収率11%)。また、男女比は、男性が7割、女性が3割であった。15年度生の男女比は約8:2であったことからすると、女性の回答率がやや高かった。業種については、サービス業、小売業、製造業、卸売業をはじめ、多岐に及んでいる。また、職種は営業・販売職を筆頭に一般職、総合職が圧倒的に多いが、既に管理職に就いている卒業生が1名いた。就業者のうち、正社員と公務員は71名(74%)を占める一方で、非正規雇用者が13名(14%)であった。また、在学中の課外活動の有無については、在学中「活動していた」が46名(48%)であった。さらに、卒業後2年経過した24歳の離職率は11%(9名)、卒業後3年経過した25歳の離職については、女性の結婚を理由とする退職が見られ、離職率は6%(5名)であった。しかし、今回の調査で特筆すべきことは、1年未満で離職する卒業生が多いこと(11名、13%)である。離職の理由は、会社に将来性がないという理由や職場の人間関係、収入面で不満との理由が多く、就職前の企業研究を十分に行えば離職を回避できていたと思われるケースがあることである。このあたりは、学生の企業研究のあり方に留意した指導や支援内容をさらに強化すべきであろう。

(2) 大学生生活の充実度

4点尺度による測定の結果、大学生生活が「非常に充実していた」と振り返る卒業生は33.3%、「どちらかと言えば充実していた」が49.0%と肯定的な回答は82.3%であった。

表1. 「大学生生活の充実」について(学部・学科別) (人)

学部・学科	1	2	3	4	合計
商 学 部	3	6	0	0	9
経営学部 経営学科	3	5	3	0	11
経営学部ホスピタリティ経営学科	6	5	1	0	12
経 済 学 部	9	14	8	2	33
法 学 部	2	7	1	0	10
外 国 語 学 部	4	5	0	0	9
国 際 学 部	2	3	1	0	6
情 報 学 部	3	2	1	0	6
合 計	32	47	15	2	96

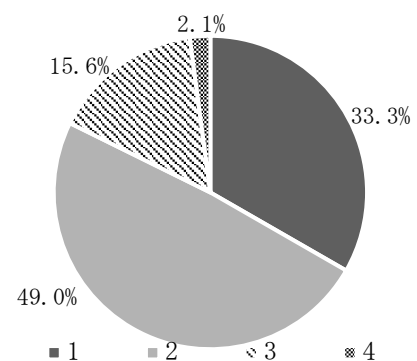


図1. 「大学生生活の充実」について
註) 1. 非常に充実していた、2. ある程度充実していた、3. あまり充実していなかった、4. 充実していなかった

(3) 大学で良かったもの、悪かったものを選択する設問

大学で良かったと思うこと、悪かったと思うことを3つ選択する設問に対する結果を表2に示した。また、図2は大学で良かったと回答する卒業生の多い順に並び替えたもので、その項目を悪かったと答えた件数も併せて示した。

その結果、卒業生が良かったと答えた第1位は「④雰囲気」、次いで、第2位は「②教育内容」であり、「①教員のサポート」、「⑨キャリアサポート」、「⑪課外活動」と続く。本学は1～4年次まで、教員と学生間、学生と学生間の緊密な対話によって、各学部・学科の知識・技能・態度を総合的に育成するゼミナール教育が行われてきた。このことが卒業生の高い満足度につながったものと考えている。キャリアセンターで行われる学生への親身なアドバイスや計画的なキャリア支援行事に対する満足度も高いことが分かった。1年次後期からスタートする正課科目の体系的なキャリア教育はもちろん、教員と連携してゼミナール単位で就職活動を推進するなど、キャリアセンターの教職協働によるキャリアサポートが評価されたものと考えている。

このように、教員のサポートやキャリアサポートを「③教育施設」や「⑥図書館」の設備面よりも評価している点は興味深い。なお、今回のアンケートでは、食堂に対する不満が高いことが判明した。

表2. 大学で良かったもの、良くなかったものを次の項目から3つ選択した結果

項目	良かった点	良くなかった点
①教員のサポート	24	12
②教育内容	27	14
③教育施設	20	22
④雰囲気	31	15
⑤環境	12	22
⑥図書館	16	3
⑦食堂	17	25
⑧ラウンジ等	8	14
⑨キャリアサポート	23	12
⑩事務サービス	4	6
⑪課外活動	23	19

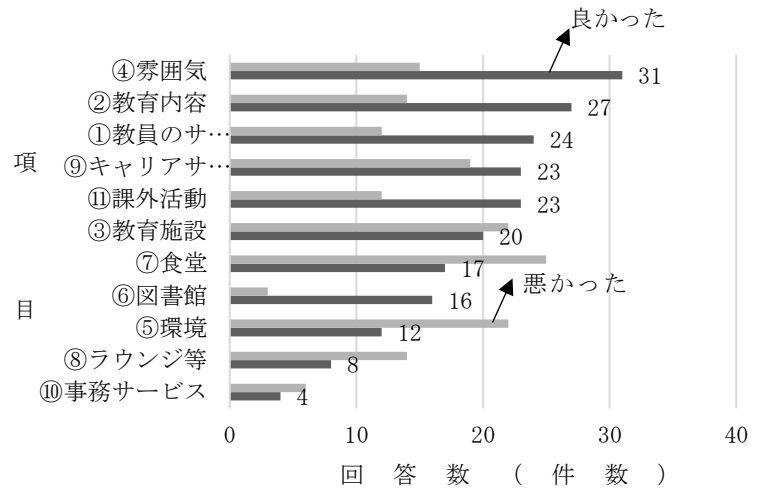


図2. 大学で良かったと思ったこと、良くなかったと思ったこと（良かった点の多かった順）

(4) 課外活動の有無と離職経験の有無、大学生生活の充実との関係を問う設問

大学生生活の充実度と課外活動の有無、卒業後の離職経験の2つの要因との関わりを調べた。在学中に課外活動した卒業生46名の内、「充実していなかった」と答えた卒業生は0名、「あまり充実していなかった」6名、「どちらかと言えば充実していた」21名、「非常に充実していた」19名であった。一方、課外活動をしなかった卒業生では「充実していなかった」2名、「あまり充実していなかった」9名、「どちらかと言えば充実していた」26名、「非常に充実していた」13名であった。したがって、在学中に課外活動を行った卒業生の方が、大学生生活が充実していたと答えている。

一方、卒業後の離職経験と大学生生活の充実の関係は離職経験の無い卒業生は、「充実していなかった」1名、「あまり充実していなかった」9名、「どちらかと言えば充実していた」26名、「非常に充実していた」24名であり、離職経験のある卒業生は、「充実していなかった」1名、「あまり充実していなかった」4名、「どちらかと言えば充実していた」15名、「非常に充実していた」5名であり、離職経験の有無も充実度に及ぼす影響は大きいことが分かる（表3）。

以上のことから、課外活動の有無、離職経験の有無によって、卒業生を4つのグループに分けて大学生生活が充実していたかを見ると、在学中の課外活動の有無、卒業後の離職の経験の有無の2つの要因は大学生生活の充実度に与える影響は大きく、在学中に課外活動を行い、離職経験の無い卒業生は、大学生生活は非常に充実していたと答えていることが分かる（図3）。

表 3. 課外活動の有無と離職経験の有無と大学生生活の充実

大学生生活の充実	課外活動の有無		離職経験の有無	
	あり	なし	なし	あり
1.非常に充実していた	18	11	24	5
2.どちらかといえば充実していた	19	22	26	15
3.あまり充実していなかった	5	8	9	4
4.充実していなかった	0	2	1	1
計	42	43	60	25

註) 回答者 96 名のうち、卒業時に就職したと回答した 85 名について集計。

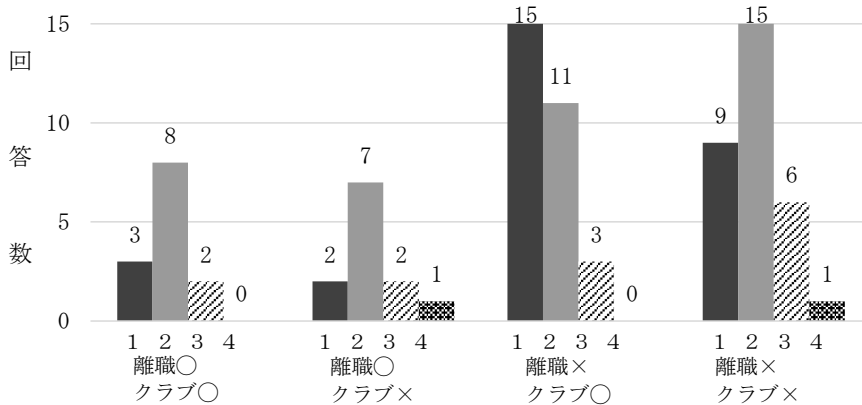


図 3. 離職経験、課外活動の有無と大学生生活の充実の関係

註) 1 : 「非常に充実していた」、2 : 「どちらかといえば充実していた」、3 : 「あまり充実していなかった」、4 : 「充実していなかった」を表す。

3. 考察

教育開発支援センターでは、在学生の学修成果の測定によって教育目標の達成度を確認するとともに、卒業生アンケートに本学の教育内容に対する満足度を問う質問を設け、卒業生からのフィードバックを得ている。2021 年度のアンケートより、「在学中にもっと身に付ければ良かった能力・資質を問う設問」の内容を変更し、より詳細なフィードバックを得られるよう改善を行った。

具体的には、「大学時代を通して、11 の汎用的能力のうち、最も身に付けたと思うものを 4 つ選び順位を付ける」、「大学時代を通して、もっと身に付ければ良かったと思う 11 の汎用的能力を 4 つ選び順位を付ける」の 2 題とし、選択する汎用的能力は、本学の 3 年次生に実施している「汎用的能力」に関する全学的な成長実感調査の 11 項目と同一とした。アンケート結果は、1 位を 4 点、2 位 3 点、3 位 2 点、4 位 1 点として得点数として算出した (図 4、図 5)。

2021 年度の結果を見ると、

「①学部に関する専門分野の知識」は、学生が在学中に「身についた」と考えている能力の第 2 位に上がっているとともに、在学中に「もっと身につけるべきだった」と思う能力のトップにも挙がっている。すなわち、大学で専門知識がある程度身についたと思う卒業生が多い一方で、社会に出ると、それだけでは不十分と感じている様子が見え始める。勉学は大学を出たら終わるのではなく、生涯続くも

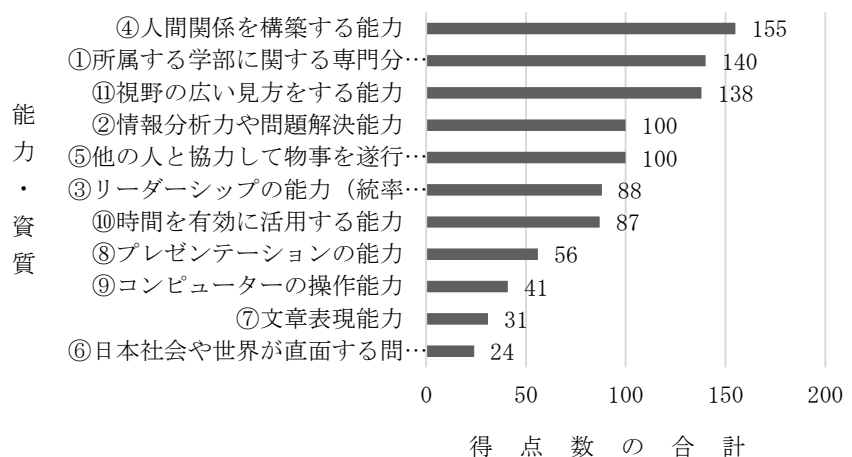


図 4. 在学中に身に付けたと思う能力・資質

のだということを示す結果といえよう。なお、②情報分析力や問題解決能力についても、同様の傾向がみられる。大学での勉学で培われた実感があいながら、社会に出るとそれだけでは不十分で、もっと分析力や問題解決能力を伸ばす必要があると感じているものと思われる。

「④人間関係を構築する能力」は、「在学中に身についたと思う能力」のトップであり、多くの卒業生が大学生活でこの能力を磨くことができた実感していることがわかる。ゼミナール、授業、クラブなどで学生同士、教員、先輩後輩との関わりを学ぶことができているものと推察する。

一方で、⑧プレゼンテーションの能力と⑨コンピューターの操作能力は、大学でもっと身につけておくべきだったという意見が多い。入社後は、データ入力、表計算、資料作りなどを担当する機会が多く、Word, Excel, PowerPointなどの基本ソフトを使いこなさなければならないのであろう。入社早々、パソコン操作で苦勞する卒業生の姿が想像できる回答である。

4. まとめ

卒業生アンケートで本学の教育で身についたこと、大学で身につけておくべきだったことを問うことにより、卒業生が社会人として必要性を感じる「社会や時代の中で求められる能力・資質」が明らかになる。今回のアンケート結果からは、学部・学科の専門知識をさらに深く学ぶカリキュラムが求められていること、およびパソコン操作能力とプレゼンテーションの能力を在学中に高めておくニーズが高いことが分かった。現在、本学におけるゼミナール教育は、人間関係構築力を養う機会となっている。ゼミナールにおいてパソコン操作を実践する機会を増やすことができれば、さらに教育効果が高まると思われる。このように、本学の教育をより時代と社会のニーズに合致したものにしていかなければならない。

以上のことから、図6のとおり、在学生の成長実感の測定結果を教育目標の可視化に役立て（学修PDCA）、卒業生からの外部評価の結果をもって、学位授与方針やカリキュラムの見直しをはかり（実学PDCA）、広い視野からの教育改善に取り組んでいきたい。

最後に、アンケートの精度をより高めるため、アンケートの回収率を増やす方が必要と言える。また、自由表記欄を設け、卒業生の意見を幅広く集める工夫も検討する必要がある。
以上

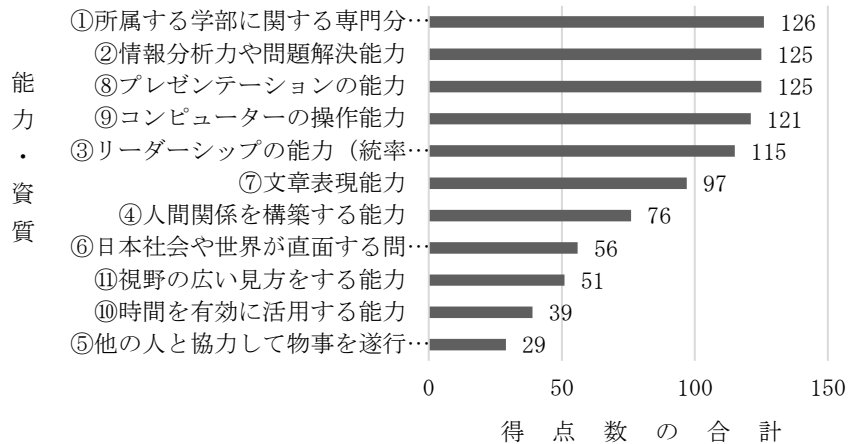


図5. 在学中に身に付けられ良かった能力・資質

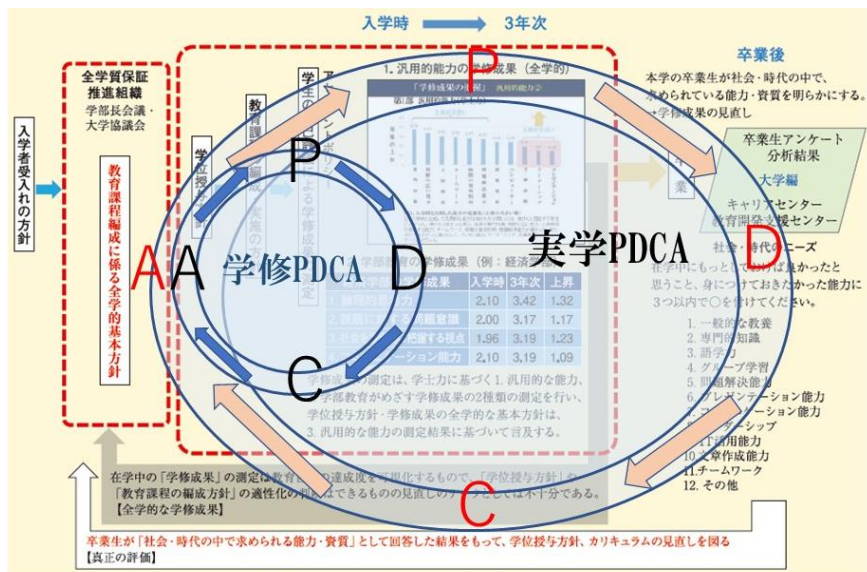


図6. 学修PDCAと実学PDCAの模式図